

## 「祝福はつながっている」

マタイによる福音書 1:1-17

創世記 12:1-4

ヨハネの黙示録 22:21

2023年12月3日  
野村 友美 師

### <アドベントを迎えて>

今年も今日からいよいよクリスマスを待ち望む待降節、アドベントに入りました。そう、あと一ヶ月足らずでもうクリスマス礼拝なんです。毎年思うんですが、今年は呉での1年目だからでしょうか、特に月日が経つのが早く感じます。本当に、私たちの身の回りでも、社会全体を見ても、いろんなことがあった1年でした。

良いことももちろんありましたし、悲しいことも、心が痛くなることもありました。

特に社会的には、今この時にもたくさんの方たちが「クリスマスどころじゃない」という状況に置かれています。なかなか終わりが見えないガザとイスラエル、そしてウクライナとロシアの戦争。世界中で続いている異常気象や災害、景気の悪化と、私たちが生きるこの世の中は、お祝いとはほど遠い薄暗さに覆われています。

それでも神様は、暗闇を照らす灯火のように、私たちの薄暗さに希望の光を灯してくださるお方です。それは街をキラキラ輝かせるイルミネーションみたいな、眩しくて華やかで、ワクワクするような光じゃないかもしれません。

どちらかという、大通りから外れた寂しい路地で、疲れてとぼとぼ歩く人の足元をささやかに照らすような、小さくて目立たない光かもしれません。それぞれの歩みに必要な光、そしてこの世界

の暗闇を照らす希望を祈り求めながら、今年もアドベントの時期を過ごしていきたいと思います。

### <マタイ福音書の系図>

さて、アドベント第1週目の今日は新約聖書のいちばん初め、マタイによる福音書の最初の部分をご一緒に読んでいきます。今日の箇所にあたった輔式の方は朗読が大変でしたね。ありがとうございました。

よりによって新約聖書の第1ページ目に、このカタカナの名前の羅列です。アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。今の私たちには意味がよくわからない、読みにくくてうんざりするような、馴染みのない名前が延々と続いています。大事なことなのかもしれないけど、何で最初からいきなりこんなよくわからない人の名前をずらずら並べるんだろう？読ませる気はあるの？と思わずにはいられません。

でもイエス様の時代の、特にユダヤ民族に属する人たちは、きっとこの系図を見て「おお！」と大興奮で盛り上がったんです。いくつか理由があるんですが、まず彼らは自分たちの系図をととても大事にしていました。

イスラエルの始まりの人、偉大な祖先であるアブラハムに神様はこう約束なさったと、旧約聖書の創世記が伝えています。

「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。

あなたを祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る。」

(創世記12:1-4)

自分たちはこのアブラハムの子孫だ、という誇りがいつの時代もどんな状況の中でも、ユダヤ人たちを支えてきました。イエス様がお生まれになる600年ぐらい前、バビロニア帝国という強くて大きな国がパレスチナ地方の国々を侵略して、たくさんのユダヤ人たちが捕虜としてバビロニアに連れて行かれた時期がありました。バビロン捕囚と呼ばれる出来事です。

70年ぐらい続いたこのバビロン捕囚の間も「私たちはアブラハムの子孫だ、神様からの祝福を受け継いでいる民族だ」と思うことで、彼らは希望を持ち続けていられたんです。

アブラハムの子、そしてダビデの子であるイエス・キリスト。そうマタイの福音書はイエス様を紹介しています。

「キリスト」は新約聖書が書かれた元の言語のギリシャ語で「油を注がれた者」、つまり「神様から任命された王様」という意味の言葉です。

今日の系図の最後にイエス様の呼び名として紹介される「メシア」というヘブライ語も聖書では「神様から任命された、神様の代理人」を意味しています。旧約聖書に登場する預言者たちは、かつてイスラエルの王様として神様が任命されたダビデ王の子孫から救い主が生まれる、と予告しました。神様からの祝福を受け継ぐ民族、アブラハムの系図に繋がっている人。しかもあのダビデ王の系図に繋がっている、新しい王様。

それがイエス様だ、私たちの救い主だ、とマタイの福音書はいちばん初めに宣言して、その証拠を系図という形で挙げてみせているんです。

ここにずらっと並んでいる名前、バビロンに移住させられる前までの名前はほとんどが旧約聖書

の歴代誌という文書で紹介されている系図に載っているものです。でもこのマタイの福音書の系図には、いくつか不思議な名前が混ざっています。タマル、ラハブ、ルツ、ウリヤの妻。

この4人は女性で、しかも系図に載せるにはちょっと問題がある名前でした。

先の男性たちと同じように、4人とも旧約聖書に登場する名前ではあるんですが、例えばアブラハムの妻のサラとか、イサクの妻のリベカみたいな「信仰深いユダヤ人女性」というイメージとは少し違います。

タマルはユダの息子のお嫁さんだった人で、夫が亡くなった後、約束を守ってくれない舅のユダにしびれを切らして、彼をだまして子どもをもうけました。ラハブは、異邦人の町エリコにいた娼婦と同じ名前です。ルツは旧約聖書のルツ記の主人公で、やっぱりユダヤ人じゃない、異邦人の女性でした。そしてウリヤの妻はバトシェバという名前の女性で、彼女に一目惚れしたダビデ王が夫のウリヤを戦いに送り出して殺してしまった、といういわくつきの人です。

もちろん彼女たちはみんな、結局は神様の祝福を受けて、イスラエルの一員として認められた女性たちでした。それでも、ただでさえ男性中心の家制度で、しかも異邦人と血筋が混ざるのを嫌っていたユダヤ民族の系図に、この4人の女性の名前が入っているのは明らかに普通じゃありません。どうしてマタイの福音書は、彼女たちをわざわざイエス様の系図に加えたんでしょうか？

この4人の女性たちの名前が入っている系図は、イエス様が確かに「アブラハムの子ダビデの子」、ユダヤ人たちがずっと待っていた救い主だけど、でもそれだけじゃないんだ、ということを証言しています。

民族の違いも性別も、人々の基準も価値観もぜんぶ超えて、すべての国のすべての人のために神様が送られた救い主。それがイエス・キリストだという宣言が、新約聖書の初めに掲げられているんです。

<祝福はつながっている>

もう一つ、このイエス様の系図には面白いことが隠れています。アブラハムからダビデまで14代、ダビデからバビロンへの移住まで14代、バビロンに移されてからキリストまでが14代。そう言って、マタイの福音書はイエス様の系図を締めくくっています。

だから何?と思うこの締めくくりには、ユダヤ民族独得の言葉遊びが隠れているんです。

ヘブライ語のアルファベットを数字に当てはめる「ゲマトリア」という計算の方法があって、それをダビデ王の名前に当てはめると4+6+4で14になるんだそうです。つまり14という数字はユダヤ人にとって、ダビデ王を連想させる数字なんです。アブラハムにつながるダビデに、神様が王としての権威をお与えになったこと。

イスラエルが神様を無視して、自分勝手なやり方を選んだ結果、王権を失って外国の捕虜になったこと。それでも神様は彼らを見捨てないで、彼らにつながる新しい王、救い主イエス様をお送りになったこと。

神様がイスラエルの歴史に関わって働かれてきたことを、ダビデ王の名前に合わせて14代ごとに区切られた系図が、ここで物語っているんです。ところで、数えてみると確かにアブラハムからダビデ王までで14世代、ソロモンからエコンヤとその兄弟たちまででやっぱり14世代になっています。でもバビロンに移住させられた後、シャルティエルからイエス様までを数えたら13世

代分しか名前がありません。みなさんも数えてみてください、1世代足りてませんよね?

これにはいろんな説がありますが、マタイの福音書はあえてこの部分の系図を13世代しか書かなかったんだと私は思います。救い主イエス様の系図につながる14代目は、私たち一人一人です。この世界の歴史に、私たち人間の一日一日に、神様が関わりを持って働いてくださることを信じて、イエス様を救い主と信じるすべての人が、この系図の14代目に名前を連ねることになる。イエス様の救いを受け取る人は誰でも、神様の祝福の系図につながられる。そういう祝福への招きを、マタイの福音書は私たちに伝えているんです。イエス・キリストにつながるこの系図には、いろんな人がつながっています。

尊敬されていた人や、有名な人や、何か立派なことをした人だけじゃありません。神様の言うことを聞かないで失敗したことがある人も、社会的な基準で見たら「なんでこの人が?」と思うような人も、どういう性格でどう生きたのかぜんぜん知られていない人も。

これまでも、これからも、イエス様を通していろんな人が神様の祝福につながれると新約聖書はまず最初に私たちに向かって告げ知らせています。アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図という形で。

世界の成り立ちやアブラハムの人生を伝えている創世記から始まって、イエス様の出来事を証言する新約聖書に至るまで、聖書全体が私たち一人一人を神様の祝福の系図に招いているんです。この祝福への招きは、どんな区別も超えてすべての人に差し出されている招きです。

新約聖書のいちばん後ろ、ヨハネの黙示録の最後の文章はこんな言葉です。

「主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。」  
(黙示録22:21)

どこで生まれ育って、どういう性格で、どんな生き方をしてきた人も、すべての人がイエス・キリストの恵みと共にあるように。一人一人、すべての人がイエス様の救いを受け取って、神様の祝福の系図につながるように。

この祈りの言葉が、聖書全体を締めくくっているんです。国も文化も、時代も価値観も、すべてを超えてすべての人がイエス・キリストによって、神の国の命につながられるように。

神様の祝福が、イエス様の救いの恵みが、すべての人と共にあるように。

この祈りが新約聖書の最初から最後までを、まるで一本の川の流れのようにしっかりと繋いでいます。私たちの歴史の真ただ中に、私たちと同じ人間としてお生まれになった神様の独り子、救い主イエス様の誕生を待ち望むアドベントの第1週目を今年も迎えました。

この新しい週の始まりに、私たちは改めて聖書の言葉に向き合ってまいりましょう。始まりから終わりまで、私たち一人一人を祝福につなげようと招いておられる神様の言葉を受け取って、味わって、一日一日を過ごしていけますように。

一本の川の流れのように、まっすぐでも曲がりくねっても、激しくてもゆるやかでも、イエス様と一緒に神の国につながる人生を歩き続けていけますように。

この世界に生きるすべての人が、神様の祝福につなげられて、神の国の平和を共に生きることができるよう。

お祈りいたしましょう。

<祈り>

愛します天の父なる神様、あなたの御名を崇めま  
す。

今年もこうして御子イエス様の誕生を思い起こすアドベントの始まりをみんなで迎えることができました。この恵みに心から感謝を捧げます。私たちの思いを超えて、あなたは一人一人を祝福の系図に招き、御子イエス様を通して御国の命につなげてくださいました。

これからも、あなたの御言葉と御わざによって、私たちを導いてください。

あなたの愛と救いに一人でも多くの人がつながられていきますように、この社会を覆う暗闇が希望の光に照らされますように、どうか私たちのこの群れを用いてください。

あなたに信頼し、あなたに期待し、あなたの御手にすべてを委ねて、小さい祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名前によって御前にお献げいたします。 アーメン。